

撮影／高橋保世 文／本紙・宮下 陸



▲エシカルノーマル代表取締役の本川誠さん。大阪市東淀川区を拠点に、ほんざい業界あわわいええガボ！など多彩な事業で地域の困りごとの解決を目指す



この業界はムリかなと思ったときにエシカルノーマルに出会ったという。西山さんがグリルの部品をつけているのは、大分県由布院温泉の成分の一つ、メタケイ酸を利用した溶液だ。エシカルノーマルでは、他にもアルカリ電解水や微生物の力を応用した洗浄剤などを用いる。使用する洗浄剤についてはすべて、専門の環境調査会社が、その影響を調べて確認し、自社サイトに公開している。これらに加え、高熱で油汚れを溶かすヒートガンや高圧洗浄機などの道具をさまざまに駆使しながら清掃する。

「本当は手袋も必要ないのですが、手をつけています」と西山さん。手荒れはほどんどなくなつた。「自分の体もそうですが、お子さんやベット、環境にやさしいことが何よりうれしく、罪悪感がないので仕事が楽しいですね」とほほえむ。

薬剤を「ポイ捨て」しないために
エシカルノーマルの代表、本川誠さんのもともとの仕事は新聞販売店。配達していると地域の困りごとが見えてきて、20分500円で解決するサービス「いえ



▲エシカルノーマルスタッフのユウトさんは、帽子から靴下まで、リユース品をそろえて支給する。使い古した靴下は襪巾にスパンコールエッカフラッグへのリユースを想定して用意する

「高齢になると掃除が大変」「掃除より家族との時間を大切にしたい」。そんな世帯が増え、需要が急増しているハウスクリーニング。今や経済的に余裕のある人だけのものではない。だが、業界で一般に使われる薬剤は多種多量、中には劇薬に指定されるものもある。人や河川への影響は大丈夫なのか。業界の常識を変え、人体や環境に負荷をかけない清掃方法を確立、普及させようと立ち上がつたのが、大阪市に本部を置く株式会社エシカルノーマルだ。「エシカル」は倫理的、公正なことを意味する。「きれいにしよう」を合言葉に、ハウスクリーニング業界の「勇気ある最初の一羽」を目指す。

温泉成分で汚れを分解

「つける時間を長めにするとピカピカになるんです」。そう話すのはエシカルノーマルのスタッフ、西山智子さんだ。この日は、大阪市内に住む上野綾香さんからの依頼を受け、上司の倉垣勝史さんと共に上野さん宅に出向いた。

なんでもきれいにすることが大好きな西山さんは、前職もビルメンテナンスの清掃業務に就いていた。だが、もともとアトピー体质で手荒れもひどく、やはり

サボ！」を始めた（本紙2022年6月号に関連記事）。中でも清掃の依頼は予想以上に多く、ハウスクリーニングに特化した部門を設立したのが事の始まりだ。

「まずは清掃の技術や知識を学ぼうと、ハウスクリーニングの大手業者に仲間の一人が出向しました」と本川さんは振り返る。その役割を担つたのが、エシカルノーマルの4人の役員の一人、前出の倉垣さんだ。今では洗濯機やエアコンを分解清掃できる高い技術を持つ。

「ナウシカがつけるような防毒マスクにゴーグル、手袋は二重三重にして複数の薬剤を使うんですが、1日続けると声はガスガス、味覚もよくわからなくなりました」と、当時の壮絶な体験を語る。風呂場には、水あかや皮脂、カビなど多様な汚れがあり、それそれに効く複数の強力な薬剤を使わなければならず、混ざれば毒ガスが発生することもあるからだ。報告に驚き心配しつつも、本川さんは、まだそのときは事態の深刻さをそれほど実感していなかつたと言う。だがあるとき、通勤途中に前方の車の窓からぱーんとごみが投げ捨てられるのを目撃した。



「あまりの行動にあせんとしたのですが、自分の車内はきれいにしたいけど、外は関係ないんだなと思ったら、ふと自分たちの仕事が思い浮かびました」。家の中はきれいにするけれど汚れがなくなるわけではない。はがして外に流す作業がほとんどだ。しかも大量の薬剤とともに。

「ごみを投げ捨てる人と考え方は一緒にですね。なんだか嫌になってしまってやめようかとも思いました」と本川さん。だがそれで何かが解決するわけでもない。人や環境への負荷は相変わらずだ。であれば、薬剤を使わずに清掃できる方法はないか。それを見つけて普及させれば社会は少しは良くなるのではないか。

「一回、しつかり考えなあかん」こうして2021年、いえサポートとは別に、エシカルノーマルを設立、本格的に環境負荷のないハウスクリークリングを目指す本川さんたちの挑戦が始まった。

知恵と工夫、試行錯誤を重ねて

まずは、印象だけでなく科学的に洗剤の影響を知る必要がある。横浜市にある



移動する車やバイクは、すべてEV車。購入費用は通常の何倍もかかるし、充電場所を探すのもひと苦労だが、環境負荷のためには絶対の一つだ

環境調査会社に調査を依頼すると、市販のトイレ用洗剤300ミリリットルを使用した場合、水生生物に影響しない程度にするには、25メートルアール64杯分の水で薄める必要があるとわかった。環境にやさしいとうたわれる洗剤を調べてもたいして違ひはない。この段階で使える市販の洗剤はないことが判明した。

ではどうするか。洗剤を使わずにどこまでできるか、使う場合はいかに人体や環境に負荷をかけないかを追究した。

「汚れを落とすのは、化学的なアプローチ、熱、物理的な力、時間という四つの要素の組み合わせです」と倉垣さん。劇薬を使えば早く簡単に汚れは落ちるが、使えないとなれば熱、力、時間をかける

商品力で上回らなければならぬといいうのが本川さんの持論だ。つてを頼り、化学物質や環境への影響を調査研究する専門家をスタッフに迎え、よりよい道具、洗浄方法、洗浄剤の研究開発に時間をかけた。さらに、年間契約により固定客を確保する「定期清掃」も始めた。住まいの各箇所を毎月順番に清掃し、汚れをため込まずに住環境を保てる仕組みだ。

「利益が出るならとつに大手企業が手掛けていますが、そうでないから取り残されている分野です。逆にそこが市場として成り立つなら社会は変わる。だから

ら100倍知恵を絞らないといけないのは大前提なんです」(本川さん)

業界のファーストベンギンに

エシカルノーマルは現在、大分県と徳島県に直営店を持つ他、近畿地方を中心に、エシカルな清掃のノウハウを共有するフランチャイズを4店、展開する。

ハウスクリークリング業は、資格も不要で初期投資も少ないため、今、個人事業主として始める人が急増している。大手業者に対抗するために、いかに安く早く

しかない。「こすつてこすつてこすり倒していた」と苦笑する。以前からナチュラルクリーニングという分野はあり、参考にしつつも、がんこな汚れを完全に落とすのは大変だった。時間と労力を必要とするので仕事はきつくなり、価格を上げなければ経営が成り立たない。業界大手と同程度の料金に抑えるのは、本川さんにとつて譲れない一線だ。

「エシカルだと高くすれば、余裕があつて意識の高い人だけが使うサービスになってしまいます」。目的は会社を成長させることではなく、エシカルな清掃を社会の普通にしていくこと。アトピーやぜんそくなど基礎疾患を持つ人、化学物質に過敏な人は年々増えている。何より一部の利用にとどまれば環境中に流れ出る劇薬は減らせないからだ。とはいえ、会社がつぶれれば元も子もない。実際、試行錯誤を重ねた1年半は支出ばかりがかさみ、役員4人で出し合った資金が底をついたこともあった。良い目的を掲げるだけで消費者が選んでくれるわけではない。目的が良ければ良いほど、そうでない業者よりも技術力、

きれいにするかを競い、劇薬を使う人も少なくないという。本川さんはそれが環境に与える影響を懸念しつつも、「彼らを否定したり駆逐したいわけではない」と言う。清掃の知識を学んだり技術を磨く時間もなく、環境への影響など知らずに使っている人がほとんどだからだ。「僕らがノウハウを提供し、彼らがちょっと勉強するだけで、今より70~80%くらい環境負荷は減らせるはず」。フランチャイズ方式を考えたのはそのためだ。

「環境汚染は待ったなしです。国の規制、業界の自主規制も必要だけれど待つてはいられない。なるべく早く広げたいなら、まずは僕らが独自の認証制度をつくって共感してくれる人を募り実践したほうが早い。もしかしたら手遅れかもしれないほど事態は深刻だけれど、放っておくわけにはいきません」

ベンギンは、えさがあるとわかついても天敵がいるかもしれない海にはなかなか飛び込まない。だが一羽が飛び込むと続々あとに續くという。エシカルノーマルに続くベンギンが増えれば、「エシカル」は業界の常識になるはずだ。